

# 風景を使いこなす生活

忽那 裕樹

Written by Hiroki Kutsuna

## 地球の気候が変動している

海面上昇や異常気象などが連日テレビや新聞で報告されている。だから、知っている。いや、知っているつもりになっている。考えてみれば、とてつもなく大きなスケールの話なのなのである。手に取れるような感覚として確かめることが本当は難しい。

実感が伴わない状況で温暖化対策メニューなどが与えられると、どうしても問題が単純に捉えられやすい。少し不安を感じる。自然環境は多様な関係の絶妙なバランスで保たれているのだから、もっと色々な関わり方があっていい。省エネルギーにしても数値目標からではなく、暮らしの中で実感する生活の視点から考えていきたい。

そのためには、身近な環境に自ら働きかけて得られる楽しみを大切にすることからはじめたい。関わり方は十人十色だろうが、お互い、それを共有することに喜びを見つけていく暮らしに心地よい可能性を感じる。日々の生活の中で、自然の微妙な変化に思いをはせつつ、「風景を使いこなす」という感覚を楽しむライフスタイルである。その延長上に省エネや地球環境へのまなざしが育まれることを望みたい。

そんなことを気付かせてくれる人々に出会える「OSOTO」という雑誌の編集を手がけている。その名の通り「おそと」、すなわち身近な屋外環境の魅力を発見して暮らしの中に活かしている人々を紹介している。「風景を使いこなす生活」を探る手がかりを教えてくれている。

雑草を食べはじめて24年という遠藤さん。里山へ行くと楽しそうな面持ち。タンポポの根、タネツケバナ、ハコベと次々手に入れていく。雑草を、ほんと、うまそうに食べる。街中でもこの調子で、一緒に歩くと、いつの間にか食べられるかどうかで並木や公園の緑を見ている自分に気付く。「生きているっていう喜びを感じる」と屋外環境について話してくれる。彼は、年々状況が変わっていく雑草の微妙な変化を見つめている。巧みなまでに環境を使いこなしている姿にかっこ良さが見える。

昔から散歩好きな千枝松村さんは、拾ってきたギターで作詞・作曲、ライブもこなす。散歩中に見つけた虫や捨てられていたおもちゃの話はつきない。また、ライブの時に会場近くの公園を探しに出かける矢井田瞳さんも、緑からパワーとヒントをもらえるという。昔から公園で自然から触発されて発想が浮かび、歌をつくり練習していたそうだ。2人のミュージシャンの捉え方は違うのだが、多様な環境への関わり方が垣間見える。

他にも、街中の河川を気持ちよく彷徨う水上タクシーライバーの女性、子どもと一緒に外で遊びを考える時間を大切にしている家族、小さな菜園づくりを通して言葉にできない気持ちを育てている夫婦などなど。自分なりの楽しみ方を見つけている人々は静かな強さを秘めている。

最後に、環境思想家エドワード・アビーの言葉。

「大地を守るために闘うだけでは十分とは言えない。それよりももっと大事なことがある。それは大地を楽しむこと」

生活の中で、身近な環境から小さな楽しみを発見して喜びを分かち合っている人々。そこには我慢するイメージなど無く、自ずと省エネ・ライフスタイルになっている姿がある。



忽那 裕樹  
(くつな・ひろき)

環境デザインスタジオ(株)E-DESIGN代表、(財)大阪府公園協会季刊誌『OSOTO』編集長、京都造形芸術大学・大阪市立大学・立命館大学非常勤講師。1966年生まれ。大阪府立大学緑地計画工学講座卒。専門はランドスケープデザイン。堺市ふれあいの森プロポーザルコンペ最優秀賞、大日六丁目にぎわい広場(神戸景観ポイント賞)など。著書は、『マゾヒスティック・ランドスケープ 獲得される場所をめざして』(共著、学芸出版社)など。